

保育者に必要とされる音楽表現力の育成に関する一考察 (3)

Bringing up the Musical Expression Ability Necessary for Nursery Teachers (3)

伊藤 仁美

ITO, Satomi

Abstract

The objective of this study is to clarify that the DALCROZE method “Eurhythmics” helps for bringing up the musical expression ability necessary for nursery teachers. To validate this method, I had studied the skills of Eurhythmics to improve musical abilities of active nursery teachers. The practice of Eurhythmics contains various movements along with music, such as clapping, walking, running, jumping, skipping and swinging which are common to children in their daily life.

After the practice I had questionnaires to ask the participants (nursery teachers) what they had grasped about “musical expression abilities for nursery teachers”.

The results of the analysis highlighted by three matters which are:

1) thoughts towards music, 2) basic techniques of music, 3) concrete guidance plans.

These three matters are closely related to bring up their musical expression abilities.

キーワード：リトミック、音楽表現、音楽と動き

1. はじめに

筆者は二稿の既報（伊藤、2009・伊藤、2010）¹⁾において、リトミックによるアプローチを通じて、保育者に必要な音楽表現力を獲得する実践の試案を検討した。幼児が快活に歌い、リズムに合わせて音楽をからだ全体で楽しむには、保育者の表現豊かなピアノ等の伴奏技能や歌唱技術が大きく関与しているといえよう。しかし、ピアノ等実技の表現技術を高める学習のみでは、保育者を志す者たち自身が、音楽と調和することの心地よさや、幼児の表現への適切な援助、工夫、表現活動の発展性、といったことを理論的かつ実践的に理解することがなかなか難しいと思われる。すなわち保育者は「音楽と動き」(Music through Movement) の関係性という視点を持って幼児の音楽表現を捉える必要性があり、保育者を志す者自身が実際に音楽に合わせて動いたりする学習経験は、保育者に求められる音楽表現力における多様性の気づきへと繋がると思うのである。そしてここで意味する「動き」とは、手を叩く、歩く、走る、ギャロップする、スキップする、ジャンプする、スイングする等、幼児の日常生活にごくごく自然に溢れている動きである、ということも付加しておきたい。

2. 目的

これまでの二稿は保育者を志す学生を対象とした授業実践の試案である。本研究では二稿から導き出された論考をふまえた上で、日々幼児に携わっている現役の保育者たちがどのように幼児の表現を捉えて音楽活動を行っているのか、又その際困難に感じていることはどのようなことか、幼児と音楽活動を共にしている際に喜びを感じるのはどのようなときか、について明らかにしていく。そのために保育者を対象としたリトミック・アプローチによる保育技能研修を行い、この研修の前後に参加者に対してアンケート調査を実施し、これらの結果を通して幼児の音楽表現を喜び分かち合いつつ伸ばさせていくことのできる「保育者に必要とされる音楽表現力」の育成における課題を検討していくことを目的とする。

3. J=ダルクローズの捉える「音楽とこども」について

ここではリトミックを創案したJ=ダルクローズ(1865～1950)のリトミック論文集「リズムと音楽と教育」の第4章「音楽とこども」の中から「本来子どもはどのように音楽的な教育を受けるべきか」について論じている部分を幾つか引用し、リトミックの教育目的について整

こども教育宝仙大学 専任講師

理してみたい。彼は「教育の目的はこどもの音楽的な生来の才能を伸ばすことにある」²⁾と述べているが、この生来の才能とは一体何であろうか。このことについてJ=ダルクローズはライオネル・ドリアックの思想を引用しながら以下のように続けている。

「(ドリアックは) 音楽的な耳を『精神の機能』と表現している。確かに単なる音の認識や理解だけでは、音楽的な耳を持っていると主張できない。外的な聴取の感覚はその上に内的な意識と感動の状態をつくり出さなければならない。(中略) 一般には、聞いた音符の名前や、関係を区別できるだけで、良い耳とされていた。しかし、これは誤りである。というのは、いろいろな音高は、音の要素のひとつにすぎないからである。耳は、曲の調性的な緊張 (tonal intensity) の度合や、強弱 (dynamics) や、音の連続の中での緩急や、音質や、我々が音楽の色彩と呼んでいる音の表現的性質 (expressive quality) のすべてを、区別できなくてはならない」³⁾

リトミックの教育目的の根幹は、内的聴取 (inner ear) の獲得にある。上記にあげた「聞いた音符の名前や関係を区別できる聴覚」はいわゆる外的な聴取であるといえるが、これだけでは音楽的に優れた良い聴覚、というには不十分なのである。外的聴取を備えた上でさらに音楽が持つ情動や、音楽が表現しようとしている事柄を感受し共感することのできる内的聴取を習得することで、真の音楽的に優れた聴覚の獲得に繋がるのである。そして、この外的聴取と内的聴取はそれぞれ役割が異なるゆえ、そのどちらの聴取能力も「完全なる聴覚」の形成には必要なのである。

「こどもたちがいかに物語を好きかを知っていながら、次のようなことを行わない親たちは、何と大切な機会を逃していることであろう。なぜなら、描写的な種類の小曲を弾いたり、ギャロップしている馬や、小さな速い動作のかわいいねずみや、鐘をならす……などのように、性格が音楽的な取り扱いに適合している人物から成り立っている物語を描くことによって、音楽に対するこどもたちの興味を起すことに目覚めていないから。(中略) こども自身で音をつくりだす方法を知るずっと前に、こどもは音楽をこのようにして聞くことを教えることができる。」⁴⁾

上記の記述は、生活の中であるいは様々な出来事の中でイメージを豊かにし、感じたり考えたことを動きや言

葉などで表現したりする楽しさを味わうことがのぞましい、としている幼稚園教育要領の領域「表現」のねらいや内容とも符合しているといえよう。

「リズムを感知することや音を区別することを訓練される前に、こどもに楽器を学ばせることは、愚かなことである。(中略) 指の練習・読譜・音楽の知的理解という三つの苦役は、かれらの一生を通じて持続する神経の疲労をまねく。」⁵⁾「音楽的な才能は耳の経験が基礎とされているのに、こどもたちは、聞いたり (hear) 聴いたり (listen) しないで、演奏することや歌うことをもっぱら教えられている。」⁶⁾

いずれも、器楽の早期教育に対する痛烈な批判意見が見受けられる。一部のいわゆる神童と言われる子どもたちはともかくとして、聴取能力が確立されるその前段階で楽器を学ばせることは、時として聴覚より触覚感覚先行の音楽教育となり、このことは彼らの聴覚やリズム感覚に悪い影響を及ぼすこともありうる、という指摘である。では、器楽の早期教育の前段階で本来子どもはどのように音楽教育を受けるべきなのか。それは未分化、未発達な末梢神経のみを訓練的に動かすのではなく、音楽のダイナミクス、デュナーミク、アゴーギク、といった様々な諸要素を聴き、それをからだ全体で表す音楽経験、すなわち筋肉感覚に訴えかけるリズム運動を通した音楽教育が先行されるべき、ということである。このことが、こどもの音楽的な生来の才能を伸ばすことに繋がるとJ=ダルクローズは述べているのである。

4. 方法

2011年6月に筆者が担当した東京都N区実務研修(N区内公立保育所、指定管理者園、私立保育所、認証保育所の職員)の受講者30名を本稿での研究対象者とした。研修1ヶ月前の時点で研究対象者30名に対し保育技術(音楽)に関するアンケート調査を行った。そして研修終了後にも事後アンケート調査を行った上で双方の集計分析を実施した。

5. リトミック・アプローチによる保育技能研修の事例

ここで報告する実践事例の講義および実技内容は次の通りである。

表1 講義内容

研修名：東京都N区子ども教育部保育所・幼稚園分野主催「保育技能研修」 日 時：2011年6月22日（水）午後 講義名：「動いて音楽～幼児の楽しいリトミック～」 対 象：N区公立保育所、指定管理者園、私立保育所、認証保育所の職員、各施設1～2名 参加者数：30名 内 容：幼児の身体発達をふまえた音楽活動の実践（括弧内は活動に用いた幼児の歌の曲名） 1. 手を叩く：「手をたたきましょう」（小林純一改詞／作曲者不明）「幸せなら手をたたこう」（アメリカ民謡）「世界中のこどもたちが」（新沢としひこ作詞／中川ひろたか作曲） 2. 歩く・ポーズをつくる：「ミッキーマウスマーチ」（漣健児日本語詞／ジミーロッド作曲） 3. 走る：「忍者の修行」（表現活動をイメージ化した筆者によるピアノ即興演奏） 4. スイング：「思い出のアルバム」（増子とし作詞／本多鉄磨作曲） 5. ギャロップ：「おんまはみんな」（アメリカ民謡） 6. スキップ：「やさいもグーチーパー」（阪田寛夫作詞／山本直純作曲）

活動内容1 「手を叩く」

- (1) 大きな円になり、一人1拍ずつ叩いてビートを回していく。慣れてきたら反対回しも行う。

- (2) 初めは音のない状態から参加者のタイミング、リズム感覚で叩いてみるが、次に筆者のピアノ即興演奏に合わせて1拍ずつ叩いてみる。（ビートを感じ他者と空間を共有している意識）
- (3) 2人でペアになり「タンタンタンウン」のリズムパターンを一緒に叩く。ピアノは即興演奏から「手をたたきましょう」へと移行していく。尚、リズムは「タン」を四分音符、「ウン」を四分休符とする。
- (4) 2人でペアになり「ウンタンタンウン」のリズムパターンを叩く。その後「幸せなら手をたたこう」の曲にあわせて、以下のリズムパターンと動作を加える。
- (5) 5人1グループになる。「世界中のこどもたちが」の歌に合わせて、1人4拍ずつ叩いて回していく。

活動内容2 「歩く・ポーズをつくる」

- (1) 自由に教室内を歩く。（空間認識、自分の中にあるリズムへの覚醒）
- (2) 歩き回り、参加者同士目が合ったら挨拶を交わしてみる。（コミュニケーション）
- (3) ピアノの即興演奏に合わせて歩いてみる。（音楽のビートを掴む）
- (4) ピアノの演奏が鳴りやんだら、その場で静止しポーズをつくる。（即時反応とポーズ創作）
- (5) 全員で1つの大きな輪になり手をつなぐ。「ミッキーマウスマーチ」のピアノ演奏に合わせて歌いながら、以下の要領で歩くこと（マーチ）を基本にした輪舞を踊る。

表2 「手をたたきましょう」（小林純一改詞／作曲者不明）

歌 詞	リズムパターン（手を叩く）
手をたたきましょう	タンタンタンタン タンタンタンタン
タンタンタン タンタンタン	タンタンタンウン タンタンタンウン
足ぶみしましょう	タンタンタンタン タンタンタンタン
タンタンタンタン タンタンタン	タンタンタンタン タンタンタンウン
笑いましょう アハハ（2回繰り返す）	ウンウンウンウン タンタンタンウン
アハハ アハハ	タンタンタンウン タンタンタンウン
ああ おもしろい	タンタンタンタン タンタンタンウン

表3 「幸せなら手をたたこう」（アメリカ民謡）

歌 詞	リズムパターン（および動作）
幸せなら手をたたこう（2回繰り返す）	頭を左右に揺らす（4拍）ウンタンタンウン
幸せなら態度でしめそうよ ほら	頭を左右に揺らす（8拍）
みんなで手をたたこう	頭を左右に揺らす（4拍）ウンタンタンウン

表4 「ミッキーマウスマーチ」(連健児日本語詞/ジミードッド作曲)

歌 詞	動 き
ぼくらのクラブのリーダーは	全員で中央を向き輪になり手をつなぎながら8歩間、右に歩く。
ミッキーマウス、ミッキーマウス	2歩間で右手のひらを正面に向けて耳の横に出し、次の2歩間で閉じながら胸まで持っていく。同時に右足も横に出して(2歩間)、次の2歩間で揃える。
ミッキーミッキーマウス	同じ動きを繰り返す。
強くて明るい元気者	全員で中央を向き輪になり手をつなぎながら8歩間、左に歩く。
ミッキーマウス、ミッキーマウス	2歩間で右手のひらを正面に向けて耳の横に出し、次の2歩間で閉じながら胸まで持っていく。同時に右足も横に出して(2歩間)、次の2歩間で揃える。
ミッキーミッキーマウス	同じ動きを繰り返す。
ミッキーマウス ミッキーマウス	全員で手を繋ぎながら中央に向かって8歩間、前に歩く。
さあ歌おう 声高く、ハイハイハイ	全員で手を繋ぎながら後ろ向きに8歩間、歩く。ハイハイハイ、のところは右手でこぶしを作り、上に高くあげながら歩く。(8歩間で元の位置に戻る)
みんなで楽しいジャンボリー	全員で中央を向き輪になり手をつなぎながら8歩間、右に歩く。
ミッキーマウス ミッキーマウス	全員で中央を向き輪になり手をつなぎながら
ミッキーミッキーマウス	8歩間、左に歩き、最後に自由にポーズをする。

表5 「おんまはみんな」(アメリカ民謡)

歌 詞	動 き
おんまはみんな	4歩間、右に歩く。
ぱっぱか走る ぱっぱか走る ぱっぱか走る	ギャロップをしながら右に進む。
おんまはみんな	4歩間、右に歩く。
ぱっぱか走る	ギャロップをしながら右に進む。
どうして走る	全員で円の中央を向きながら4回手を叩き、両手のひらを上にしてポーズをとる。
どうしてなのか 誰も知らない	首を左右にかしげて考えるポーズをとり(8拍)、右手を胸の前で振り(4拍)、腕組みをする。(3拍)
だけど	中央に向いていた身体をくると右方向に向ける。
おんまはみんな	4歩間、右に歩く。
ぱっぱか走る ぱっぱか走る ぱっぱか走る	ギャロップをしながら右に進む。
おんまはみんな	4歩間、右に歩く。
ぱっぱか走る	ギャロップをしながら右に進む。
おもしろいね	全員で円の中央を向きながら4回手を叩き、両手のひらを上にしたポーズをする。

活動内容3「走る」

- (1) 自由に走ってみる。(空間認識、自分の中にあるリズムへの覚醒)
- (2) 走る・止まる・ポーズを創ることを用いた音楽表現活動「忍者の修行」を行う。忍者のように手裏剣を持って敵に飛ばすようなしぐさをしながら、ピアノ即興演奏が聞こえている間、音楽に合わせて小走りをする。ピアノの音が止まったら、走るのをやめる。(即時反応)
- (3) 「忍法、〇〇に変身の術」と指導者が指定した事物に

変身をする。(模倣活動)

- 例: 「忍法、かべに変身の術」「忍法、蛇に変身の術」「忍法、うさぎの赤ちゃんに変身の術」等。
- (4) 今度は2人以上で表現活動が成立する「忍法、変身の術」を取り入れる。
 例: 「忍法、机と椅子に変身の術」「忍法、ぞうの親子に変身の術」「忍法、虹に変身の術」等。

活動内容4「スイング」

- (1) 2人で向かい合って手をつなぎ、8分の6拍子の音楽

表6 「やきいもグーチーパー」(阪田寛夫作詞/山本直純作曲)

歌 詞	動 き
やきいも やきいも おなかがグー	6回スキップをし、歌詞「グー」のところで手をグーにする。
ほかほか ほかほか あちちのチー	6回スキップをし、歌詞「チー」のところで手をチョコキにする。
食べたらなくなる なんにもパー それ!	6回スキップをし、歌詞「パー」のところで手をパーにする。
やきいも まとめて グーチーパー	4回手を叩いた後、歌詞「グーチーパー」に合わせて手をグー、チョコキ、パーと動かす。
(歌い終わったら)	ペアになりじゃんけんをする。

表7 受講者の保育職従事経験歴 (計30名)

保育者としての勤務経験年数	該当人数
保育者としての勤務経験年数が1年未満	2名
保育者としての勤務経験年数が1年～5年	6名
保育者としての勤務経験年数が6年～10年	2名
保育者としての勤務経験年数が11年～15年	1名
保育者としての勤務経験年数が16年～20年	6名
保育者としての勤務経験年数が21年～25年	4名
保育者としての勤務経験年数が26年～30年	5名
保育者としての勤務経験年数が30年以上	2名
保育者としての勤務経験年数が未記入のため不明	1名

に合わせて左右に揺れる。(スイング感覚を味わう)

- (2) 音楽は筆者のピアノ即興演奏から「思い出のアルバム」へと移行していく。2人で手をつないでいるがピアノの高音の合図が聞こえたら、手をつないだままひっくり返り背中合わせになる。慣れてきたら4人でも行ってみる。(合図の聞き分け、音楽に身を委ねて動く心地よさ等を味わう)

活動内容5「ギャロップ」

- (1) 自由にギャロップしてみる。(重心が右足から左足へと移動し、一瞬身体が浮く感覚を掴む)
 (2) 「おんまはみんな」に合わせて、ギャロップを行う。
 (3) 今度は歌詞で「ぱっばか走る」の部分だけギャロップを行い、その他は歩行する。

活動内容6「スキップ」

- (1) 自由にスキップしてみる。(片足で床を蹴り上げ、身体が上に行き一瞬浮く感覚を掴む)
 (2) 「やきいもグーチーパー」に合わせてリズム通りにステップする。幼児の歌にはスキップのリズムが多く含まれていることに触れ、このことが曲に躍動感をもたらすことを意識させる)

6. 結果と考察

6.1 結果 (研修の事前アンケート調査)

本研修へ参加するにあたり、受講者は日々どのような問題意識を持ちながら保育現場において乳幼児らと共に音楽活動にあたっているのだろうか。このことを明らかにするために事前アンケート調査を行った。その結果を表7～表9に挙げた。

6.2 考察 (1)

本研究の対象者30名は、表7の通り保育職従事経験歴は一番年数が短くて2か月、最も長いと30年以上という経験値を持つ幅広い集団であった。設問への解答は全て自由記述としたため、調査結果を記述内容に基づき3つのカテゴリー「音楽に対する心情・感性」「音楽に関する基礎的な技術や能力」「音楽活動の具体的な指導計画・指導方法」に分類した。

まず表8「本研修で学びたいと思っていることはどのようなことですか」についての設問に対する調査結果を見てみたい。幼児は身体全体を使って音楽を表すことを好む—すなわち動きを通して音楽を経験する学習構造が効果的であることを、対象者自身がよく理解しているこ

表8 設問「本研修で学びたいと思っていることはどのようなことですか」

カテゴリー	サブカテゴリー
音楽に対する 心情・感性	音楽に苦手意識を持っている為保育活動にあまり取り入れていない。自分に出来ることは何か、再考したい。
	幼児と共に楽しめるリトミックや音楽活動を学びたい。
	音楽が子どもに与える良い影響、また音楽嫌いの子どものしなない為の工夫を知りたい。
	リトミックを通して身体を動かしたり、音楽表現する楽しさを子どもたちに伝えていきたい。
	楽しく感じることでできるリトミックの内容と実践方法は何か。
	どのようにすれば楽しくリトミックが行えるのか。
	歌や音楽、身体を動かすのも大好きな子どもたち。是非、現場で即実践でき、楽しめるものを習得したい。
音楽に関する基礎的な 技術や能力	リトミックで必要な身体表現方法、動きのボキャブラリー。
	リトミックでの基本的な動き方、遊び方。
	子どもにとって楽しい動きとは何か。
	リトミックという言葉はよく耳にするが実際に体験したことはないので、基本から勉強したい。
音楽活動の具体的な 指導計画、指導方法	3歳児の発達に即した動き（身体表現）はどういうものか。
	幼児クラスを担当しているので年齢にあったリズムや個人、ペア、集団で楽しめる動きについて知りたい。
	0歳児を担当しているので乳児でも楽しめる内容のもの。
	0～2歳児までの園なので未満児にも活用できる楽しいリトミック。
	具体的な身体表現方法について知りたい。
	初めてリトミックをすることも子どもたちに対しての導入方法を学びたい。
	毎週リズムを行っているが、どのような流れで行うと身体づくりに役立つのか。
	いつも同じパターンのリズム遊びになってしまうので、新しい内容のものを勉強し保育に取り入れたい。
	各年齢にふさわしい題材と動きのリトミック。
	ゲーム性のあるリトミック。
	ボール等身近な教具を使ったリトミック。
	年間計画の立て方について学びたい。
	乳児がその場で身体を動かせる楽しいリズム活動とはどういうものか。
すぐにできるリトミックの指導方法。	

とが伺える。筆者はリトミックによるアプローチを通じて、保育者に必要な音楽表現力を獲得する試案を継続的に検討しているが、二稿の既報での実践事例では保育者を志す学生を対象としていた。この為、身体表現を通して音楽を学ぶ (Music through Movement) ことがいかに幼児にとって大切な経験となりうるかについて理解を深めるために、保育者を志す者たちがリトミック・アプローチ実践と並行して理論的に幼児の音楽発達を学ぶことの重要性を感じた二稿でもあった。このことは「動いて楽しかった、面白かった」といった、活動内容そのものに一喜一憂するのではなく「何故動くのか。音楽に合わせて動くことはどのような教育目的を持ってなされているのか」についても十分に納得していなければ、リト

ミック・アプローチ実践は対象者にとって意味をなさないからである。これに対して本研究の対象者は、子どもが音楽に合わせてからだ全体を動かしながら楽しむ様子を日々保育の中で見守り、援助し理論的かつ経験値として子どもの音楽発達を受け止めていることが見受けられる。

「音楽に対する心情・感性」のカテゴリーでは、保育者自身が音楽に対して前向きな気持ち、あるいは苦手意識の有無に関わらず「楽しい音楽活動を子どもたちと実践していきたい」といった、音楽に対してたとえ臆する気持ちがあったとしても、愛好する心情を持ち続け保育技術を向上させていきたいとする傾向が見受けられる。次に「音楽に関する基礎的な技術や能力」のカテゴリーで

表9 設問「現場で音楽活動をしていて困ったことはありますか。それはなぜ困りましたか」

カテゴリー	サブカテゴリー
音楽に対する 心情・感情	苦手でも楽しく音楽やリトミックをやっていききたい。
	音楽に消極的の子どもにどうやって楽しさを伝えたらよいか。
	つまらない、やりたくない、とやる前から言う子どもへの対応。
	音楽に対して興味関心を表さない子どもとどう向き合ったらよいか。
	歌を歌う時間を1日のうちに必ず設けているが、歌うことに興味のない子どもの姿が見られる。
	リズム遊び等途中で飽きてしまいふざけてしまう子どもがいると活動を中断し注意をしなければならず、その他の楽しんで行っている子どもの活動をとめてしまうことがある。
	1歳児を担当。まだ言葉も出ないし真似をすることも少ない。しかし繰り返すことにより少しずつやろうとする姿もあるので反応がゆっくりでも継続して行い、子どものわずかな変化や成長を見逃さないようにしたい。
音楽に関する基礎的な 技術や能力	ピアノが苦手なので自分自身で弾くことがきわめて少なく、他の保育士に弾いてもらっていた。自分で弾くときは簡単な曲だけになってしまう。
	子どものテンポ（リズム）に合わせてピアノを弾くことの難しさ。
	子どもの歌の伴奏楽譜が難しい。練習してもなかなか弾けない。
	歌を歌う時、子どものキーは高いのに保育者の年齢が増すにつれ高音が出にくくなり、歌の指導が難しいと感じる。発声法を知りたい。
	ピアノが苦手ゆえ、弾いているとどんどんテンポが速くなる。
	イメージ即興演奏を必要とされる場面で対応できない。
	リトミックを取り入れたいがピアノに自信がないので踏み出せない。
音楽活動の具体的な 指導計画、指導方法	体操や踊りなど保育者の模倣をすることが難しい子どもへの援助の在り方。
	リトミックを専門的に勉強していないのだが包括的に音楽活動には組み込んでいる。これでよいのだろうか。
	合奏などを通して音楽リズムの面白さを伝える方法。
	どのように導入をし、身体表現につなげていったらよいか。
	動きがワンパターンになりがちなので、動きのバリエーションを増やす具体的な方法。
	楽器あそびを含めた音楽活動の指導方法。

は、リトミック活動での「身体表現、動き (movement)」に関する記述が目立つ。リトミックは指導者のピアノ演奏、即興演奏に合わせて動く活動が多いゆえ、ある程度の基礎的なピアノ演奏能力が必要とされる音楽教育方法である。しかし表8においてピアノの技術向上に関する記述は見当たらない。「本研修で学びたいことは何か」という問いに対して、対象者はピアノの演奏技術は単発の研修で習得するものではないことを熟知しているのである。

表8の中で一番活発な意見が記述されていたのは「音楽活動の具体的な指導計画、指導方法」のカテゴリーである。対象者は各々が日々担当している乳幼児の姿を頭に思い浮かべているので、本研修で実際的なリトミックの指導内容や実践方法を知りたいと強く感じ、そのことを明日からの保育に生かしたい、と考えているのである。また、現在リズム遊びやリトミックを保育の中の音楽活

動に取り入れてはいるが、対象者自身が活動内容にマンネリズムを感じていることが推察できる記述も見受けられる。幼児は音楽やリズムに合わせて身体を動かすことで、音楽との一体感の心地よさを味わうことができる。だとすれば、どうしたら幼児の心を強く惹きつけることのできる指導案を編み出し、表現豊かな音楽活動を展開することができるのか。そのために音楽活動の創意工夫の仕方や技術を習得したい、具体的に教具を用いた指導計画を知りたい、他者とコミュニケーションをとりながら協働する音楽活動を学びたい等といった、対象者が本研修で習得したい事項が表8の3つのカテゴリーの中で互いに関わり合いながらみえてきたのである。

次に表9「現場で音楽活動をして困ったことはありますか。それはなぜ困りましたか」の設問に対する調査結果を概観してみたい。「音楽に対する心情・感情」のカテゴリーでは幼児が主体的に音楽を楽しめていない様子を

表10 設問「保育者に必要な音楽表現力はどのようなことだと考えますか」

カテゴリー	サブカテゴリー
音楽に対する心情・感性	保育者自身が楽しく歌ったり踊ったり表現すること。「音楽はとても楽しいよ」「一緒にやるともっと楽しいよ」というメッセージを子どもたちに発信すること。
	心を開いて音楽の楽しさを伝えることで、子どもたちは素直に返してくれる。自分が心底楽しむことが表現のモデルとなる。
	表情、笑顔、明朗活発に音楽を楽しむ力。音楽の楽しさを伝えることのできる力。
	保育者自身が楽しんでいる様子が大切。それが子どもたちの「おもしろそう」「楽しそう」「やってみたい」という意欲関心へと繋がっていく。
	沢山の「楽しい音楽体験」を通じ、子どもたちには健やかに育って欲しい。
	音楽に対して自由を感じる気持ち。
	子どもたちからの音楽に対する感情を汲みとり、子どもたちと同じ気持ちを持って表現を楽しむこと。
	子どもたちと一緒に音楽の楽しさを共感していくこと。
	子どもの音楽に対する思いを受け止めてあげること。
	想像性、創造力。
	技術がまず自分にとってのハードルとしてあり、思うように活動ができなかった。しかし音楽を楽しむ気持ちこそは、子どもに直接伝わる。
豊かな発想力、生き生きと楽しむこと。	
音楽に関する基礎的な技術や能力	ピアノの技術。手遊び歌、替え歌等のレパートリー。子どもたちの成長に応じて音楽活動をする力。
	楽器の演奏能力。
	歌唱表現力。保育者自身が好きな歌を歌うと、その歌が子どものお気に入りになりリクエストしてくれる。次第に一緒に歌い、歌の楽しさを共感できるから。
	子どものイメージできるもの（動物等）になって、保育者が一緒に身体表現できること。また、その際イメージ即興演奏が弾ける音楽能力。
	歌のレパートリー。正しく表現豊かに歌えること。
	リズム感、テンポ感。
	ピアノだけでなく、からだを動かしながら表現できること。
	音楽を動きで表すことのできる力。
	読譜能力。楽譜を見てすぐ弾ける即戦力。
音楽活動の具体的な指導計画、指導方法	指導法の創意工夫。選曲したもののリズムをとらえ、どのようなテンポで弾くのか、明るく歌うのか、優しく歌うのか。曲想をしっかり伝える力。
	教えるという姿勢ではなく、一緒に楽しむという姿勢が大切。
	固定観念にとらわれず、様々な視点から音楽を感じて指導方法を膨らませていくこと。
	子どもが気持ちを揺さぶられたり、気持ちを浄化していく歌（音楽）を選ぶことのできる力。歌をうたうとき、歌唱だけでなく、関連するおはなしの世界にも触れたり造形表現にも発展させることのできる総合的な活動。
	子どもたちがやってみたい、と思うような音楽の世界をつくること。

憂慮したり、あるいは対象者自身が音楽に対して臆している心情が見受けられる。また「音楽に関する基礎的な技術や能力」のカテゴリーにおいて圧倒的に占めている内容は、ピアノの演奏技術に関するものである。表8の「音楽に関する基礎的な技術や能力」の項目では身体表現、動き（movement）に関するものが多く占めていたのに対し、表9での同項目ではピアノの演奏能力について困難を感じている意見が圧倒的である。対象者が保

育の中で主体的に音楽活動を取り入れたいと思っても、ピアノ技術に対しての不安感があるとつい消極的になってしまう、ということが推察される。すなわちこのことは、本研究の目的である、保育者に必要とされる音楽表現力の育成を考察するにあたり決して見落とすことのできない大きな課題点であろう。それでも音楽に関する基礎的な技術力を高め音楽を介して子どもたちと表現豊かに関わりたい、という対象者の思いはどこからくる

表 11 設問「子どもたちと音楽活動をしていて喜びを感じる瞬間はどんなときですか」

カテゴリー	サブカテゴリー
音楽に対する心情・感性	歌ったり踊ったりした後に「あー楽しかった」といわれたとき。
	何度も活動をリクエストされたとき。
	合奏などで皆が力を合わせて出来るようになったとき。
	乳児との音楽活動で今までやらなかった子どもが、ある日突然やっているとき。
	子どもたちが音楽に包まれて笑顔が溢れているとき。
	子どもたちと共感できたときや「もう1回やろう」という声が出たとき。
	歌っているとき、自然と子どもと目と目があう瞬間。
	自分のピアノ伴奏でこの一瞬を味わいたい。
	ふと口ずさんでいる姿を見たとき。
	音楽に取り組む真剣なまなざし。
	覚えた歌を自宅でも歌っている様子を保護者から聞いたとき。
	「できた!」という達成感でいっぱい顔を見たとき。
	自分自身が好きな歌を子どもたちも好きになってくれて一緒に歌うときはとても豊かな気持ちになる。
	表現方法は自由であっても、全員が一緒にまとまって活動している姿は活動の意義と子どもたちの成長を感じる。
	音楽を通して一体感が得られたとき。響きの共有は音楽の大きな魅力のひとつ。
	ピアノを弾いていると「歌いたい」と言ってピアノのそばに来て歌ってくれるとき。
	保育者の真似をして子どもたち同士で遊んでいる様子を見たとき。
	自分が弾いているピアノ伴奏のテンポと子どもの歌がぴたりと重なったとき。
	次に何をするのか期待をしながら待っていてくれる様子とき。
	一歳児担当だが、年度始めはあまり関心のなかった子どもが、手遊びや歌を通じて音楽に関わっていくことで、今では手や動きを真似して喜んだり、歌うときも身体を大きく揺らしながら歌おうとする様子を見たとき。
「この歌大好き」とお気に入りの曲を教えてくれるとき。	
リズム遊び、楽器あそび、歌唱等の音楽活動を通し、子どもたちが生き生き伸び伸びとした表情をみせたとき。	
年長、年中児らが日々うたっている歌の歌詞を楽しんでいたたり味わっていたり感動しているのを見ると、子どもの感性の豊かさに気づかされる。	
歌詞を覚えられなくても身体を揺らしたりして曲を楽しんでいることが伺えるとき。	
昨日より今日、今日より明日、としっかり音楽を通じて子どもたちの土台が築かれていることを感じたとき。	

ものであろうか。歌ったり音楽を聴いたり動きで表したり自由に反応したり、メロディやリズムに呼応したりする音楽体験がいかに感性を豊かにするものであるか、という確かな手ごたえを日々の子どもの姿を通じて対象者は感じ取っているものであろう。

6.3 結果 (研修の事後アンケート調査)

対象者は、本研修を終えてリトミック・アプローチによる実践をどのように感じたのだろうか。またそれぞれが抱えている課題に関しての何らかの糸口を得ることはできたのだろうか。研修終了直後に事後アンケート調査を行った。その結果を表 10～表 12 に挙げた。

6.4 考察 (2)

研修終了直後に行ったアンケート調査、表 10「保育者に必要な音楽表現力はどのようなことだと思いますか」という問いに対する調査結果を見てみたい。「音楽に対する心情・感性」のカテゴリーに関連する意見が多々記述されていたが、それらのほとんどは「保育者自身が音楽を楽しみ、その様子が子どもたちに伝わっていく」という内容のものである。保育者自身が積極的に音楽に関わり音楽を楽しみながら歌ったり演奏したり、からだ全体で表現したり創作活動に親しむ様子は、子どもたちにとって表現活動のロールモデルになることへの再認識であろう。次に「音楽に関する基礎的な技術や能力」のカテ

ゴリーはどうだろうか。表8における同カテゴリーとの調査結果を比較してみると、両者にはそれほど相違はないと見受けられ、ピアノ、歌唱表現等に代表される保育者に必要とされる音楽表現技術をもっと多様性を持って向上させたい、というものである。ある対象者は子どもの歌を表現豊かに歌ったりリズムカルにピアノ伴奏することのできる能力、またある対象者は音楽のイメージ化(創造的な模倣活動等)に沿った即興演奏能力が必要であると捉えている。このような音楽技術を獲得するのは容易ではないが、幼児の表現を支えるには保育者として十分な音楽技術や基礎的な能力が肝要であり、またこれらの能力を向上させていくのは保育者にとって避けて通ることは出来ない、と把握しているのである。

次に「音楽活動の具体的な指導計画、指導方法」のカテゴリーではどうだろうか。表8の同カテゴリーでは現在対象者が担当している年齢児に関する、具体的なリトミック実践について知りたい、という要望が強かった。いわゆる、明日から即実践できるハウツーを知りたい、というニーズが多かった印象を受ける。しかし研修終了後に行ったアンケート調査で導かれた表10での結果は、研修前に行ったアンケート調査の表8、表9の結果と若干異なっていた。表8、表9の2表ではパターン化してしまう音楽活動に対して対象者、そして子どもたちがある種のマンネリズムに陥ってしまうという状況が述べられており、そのためにも新しい音楽活動のアイデアを知りたいという対象者の切実な思いを垣間見た。しかし真似してみたい、表現してみたい、と子どもたちが感じる魅力的な音楽活動は、リトミックを行う際の手順のみをいわばノウハウとして知り得たとしても「音楽と動き」を融合させることの真の教育的意義を理解していなければ、やがてまたマンネリズムのスパイラルに陥ってしまうのである。音楽活動から広がっていく他領域の表現活動への繋がりをリトミック・アプローチを通して対象者が感じ取ったことは、本研修での有意義な成果のひとつだと察することができよう。

最後に表11の設問「子どもたちと音楽活動をしていて喜びを感じる瞬間はどんなときですか」ではカテゴリーを分類せず「音楽に対する心情・感情」に集約した。寄せられた記述内容から特徴的なものを幾つかあげてみたい。

ひとつは対象者が音楽活動をしっかりと支え、子どもとの「表現の交わり合い」が生まれた時、保育者としての非常な充足感を感じていることについての記述である。「何度も活動をリクエストされた時」「あー楽しかったと言われた時」「笑顔があふれている時」「ふと目と目があう瞬間」等、対象者は音楽を通じて子どもたちと味わう一体感に、大きな喜びを感じているのである。2つめは、子

どもたちの成長、音楽的発達に触れた時の感動に関する記述である。「今までやらなかった子どもがある日突然やっている時」「ふと口ずさんでいる姿を見た時」「保育者の真似をして子どもたち同士で遊んでいる様子をみた時」「あまり関心のなかった子どもが今では手や動きを真似して喜んだり、歌う時も身体を大きく揺らしながら歌おうとする様子を見た時」等のサブカテゴリーがこれに当てはまるだろう。さらに、ある対象者の「昨日より今日、今日より明日、としっかり音楽を通じて子どもたちの土台が築かれていると感じた時」の言葉からは、音楽活動を通して子どもたちの全人的な育ちを見守っている優しい眼差しを感じ取れる。その際保育者は、確かな音楽表現力を持って子どもが本来的に持っている性質、すなわち音楽を聴いたり表現して楽しむことのできる生来の才能に対して、積極的に働きかけていく使命があるのではないだろうか。

6.5 総合考察

2度のアンケート調査を実施した結果、「音楽に対する心情・感性」「音楽に関する基礎的な技術や能力」「音楽活動の具体的な指導計画、指導方法」の3つのカテゴリーは保育者の音楽表現力について論じる時、非常に密接な関係性にあるということが、全てのアンケートでのサブカテゴリーに見受けられた。すなわち幼児の音楽活動に携わる際、音楽に対する気持ちや思い、といった情意面と基礎的な能力面とを関連させ合いながら指導計画を立て、実践にあたることが重要だといえよう。

米国の音楽教育者、F. W. アーロノフによると現場に立つ教師は音楽教育の指導法を学ぶ必要がある一方で、いわゆるノウハウに頼った方法のみを習得してしまうと、指導の中で予定していた手順や過程のみに注意がうばわれ、幼児の表面的な知識や技術だけを評価し、音楽発達のための長期的視野を失ってしまいがちだ、と指摘している。⁷⁾ 他方で、音楽の本質や幼児の音楽発達についてはっきりとした考えを持っている教師は、独自の指導法を編み出すことができる、としている⁸⁾。すなわち、教師(保育者)は音楽構造をしっかりと理解し、かつ幼児の環境と発達段階を考慮しながら音楽活動にあたらなくてはならないのである。しかしながら、音楽を専門的に学んでいない者にとり音楽構造を理論的に習得し概念を分類することはいささか難しいことと思われる。このことにおいてアーロノフはリトミック・アプローチによる「音楽的概念表」を作成し音楽構造を分類しているので、その一部を以下に示したい。

表12 アロノフによる「音楽的概念表」⁹⁾

〈リズム〉 1. 拍 2. 拍を細分する同じ長さの音 3. アクセント 4. 拍子 5. 形 6. パターン 7. 休符 8. 言葉のもつリズム
〈アゴーギク〉 1. テンポ 2. 変化の度合い
〈メロディ〉 1. ピッチ 2. 上がり下がりの方 3. 形

本研修内容とアロノフによる「音楽的概念表」を照らし合わせてみたい。活動内容1「手を叩く」は、〈リズム〉の1.拍、6.パターン、7.休符、活動内容2「歩く・ポーズをつくる」では、〈リズム〉の4.拍子、8.言葉のもつリズム、活動内容3「走る」では、〈リズム〉の2.拍を細分する同じ長さの音、活動内容4「スイング」では〈アゴーギク〉の1.テンポ、2.変化の度合い、活動内容5の「ギャロップ」および活動内容6の「スキップ」では〈リズム〉の3.アクセント、6.パターン、8.言葉のもつリズム、をそれぞれ経験することをねらいとしたものである。これらの音楽的概念を幼児の日常生活に溢れている身体活動を通して体験させていくことの出来る指導力が、保育者には求められるのである。その際音楽を構成する諸要素のどの部分に焦点をあてて「音楽と動き」による活動を行うのか、についての明確な指針を持つことが大切かと思われる。このことが希薄であると、何故音楽活動を通して動くのか、音楽に合わせて手を叩いたり、歩いたり走ったりするのか、といった活動内容の意義そのものよりも、指導案を成功させることに強く気持ちが揺らいでしまうであろう。もちろんこの活動にはどのようなねらいがこめられているのか、音楽的概念の何を習得するためのものか、の全てを幼児に対して言語化していくことは必要ではないといえよう。しかし保育者自身はこれらの音楽的概念を十分理解した上で、基礎的な技術や能力を用いながら幼児の発達段階に相応しい指導計画を立て、これを実践し、ひいてはその活動が幼児の音楽を

愛する心、気持ちを引き出し伸ばさせていくことが、保育者に必要とされる音楽表現力なのではないだろうか。

7. おわりに

本稿では、リトミック・アプローチによる保育技能研修が対象者にとってどのような音楽経験となりうるか、また現場では保育者に必要とされる音楽表現力をどのような能力だと考え日々の保育にあたっているかについて調査するために、研修前と研修後の2度にわたってアンケートを行い、その調査結果を考察した。寄せられた記述内容を「音楽に対する心情・感性」「音楽に関する基礎的な技術や能力」「音楽活動の具体的な指導計画、指導方法」の3点に分類したが、保育者に必要とされる音楽表現力の育成について考える時、これらの3つのカテゴリーが不即不離の関係性を保つことの重要性が明らかになった。今後も、保育者を志す者たちが、将来的に豊かな表現活動を独自に編みだす喜びを感じることができるよう「音楽と動き」を融合させた実践研究を継続していきたい。

最後に末筆となるが、本研究をすすめるにあたり東京都中野区子ども教育部主査、武田磨子氏に多大なご協力、ご支援を頂いたことを心より感謝の意を表したい。また、本研修に参加して下さり貴重なご意見をお寄せ頂いた30名の先生方にも深く御礼を申し上げる次第である。

註

- 1) 伊藤仁美 (2009)「保育者に求められる音楽表現力の育成に関する一考察」、『こども教育宝仙大学紀要』第1号
- 伊藤仁美 (2010)「保育者に必要とされる音楽表現力の育成に関する一考察 (2)」、『こども教育宝仙大学紀要』第2号
- 2) エミール・ジャック＝ダルクローズ (1975)『リズムと音楽と教育』板野平訳、全音楽譜出版社、p.49
- 3) エミール・ジャック＝ダルクローズ、前掲書2、p.49
- 4) エミール・ジャック＝ダルクローズ、前掲書2、p.51
- 5) エミール・ジャック＝ダルクローズ、前掲書2、p.56
- 6) エミール・ジャック＝ダルクローズ、前掲書2、p.59
- 7) フランセス・アロノフ (1990)『幼児の音楽』畑玲子訳、音楽之友社、p.55
- 8) フランセス・アロノフ、前掲書7、p.55
- 9) フランセス・アロノフ、前掲書7、p.56